



クリスチャン・スミスの社会学論：人格主義的社会理論のプロジェクト（特集1 社会学的説明か「社会学的言い訳」か：個人と社会をめぐる現代の議論から）

池田，直樹

(Citation)

社会学雑誌, 40:36-53

(Issue Date)

2023-12-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100486319>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486319>



特集1 社会学的説明か「社会学的言い訳」か ― 個人と社会をめぐる現代の議論から

クリスチャン・スミスの社会学論

—— 人格主義的社会理論のプロジェクト ——

池田 直樹

神戸大学国際文化学研究科助教

一 はじめに

『社会学雑誌』の月号の特集企画は「社会学的言い訳」(以下、「言い訳」と略記)をめぐる議論である。「言い訳」とは、梅村麦生によれば、「主に社会学による、何らかの社会現象の原因や背景となる社会構造や社会関係などに基づいて行なう説明を、『社会学的言い訳』として難ずる言説」(梅村、二〇二一・一)だとされる。ここに述べられているような社会学による語りの様式、すなわち様々の事象に社会という視座を設定し、社会を主語として語ろうとする様式は、例えばE・デュルケームの自殺論に典型的に示されているように、確かに社会学の成立の当初からその説明様式の一つの雛型をなすものであった。だとすれば、こうした説明の仕方をめぐる議論は、ひいては社会学そのものの意

義をめぐる議論であると言うことができる。それゆえこの問題にまつ議論を、「誰のための、何のための社会学か」を問う公共社会学の議論に接続することも無論可能であろう。「言い訳」論がこのように大きな拡がりを持つ主題であることを確認した上で、本稿ではこの主題に関してアメリカ社会学の一つの動向を紹介することとしたい。

ここで取り上げるのはC・スミスによる社会学の意義論である。スミスは批判的実在論などの思潮に基づいて、自身が「人格主義的社会理論(personalist social theory)」(Smith, 2015: 8)と呼ぶ学説を提唱している人物である。スミスは批判的実在論に立脚した社会学者としてはすでにその代表格の一人と見なされており、例えばこの立場からアメリカ社会学を論じたD・ポーポラの著作においては、彼の著作への数多くの言及が見られる(Porpora, 2015)。

それでは、スミスの議論は「言い訳」論といかなる点で関連し、これに対していかなる位置を占めるものなのであるか。ここで彼を取り上げるのは、その理論構築を駆り立てていた背景と動機が「言い訳」論に深く関わるものであったと見なしうるからである。梅村によれば「言い訳」論は、アメリカにおいては主として右派の論客からの社会学批判として展開された。概してそれは社会学の外部から寄せられた批判であったが、アメリカ社会学の左傾化（とされる傾向）に対するスミスの批判は、これと同種の議論を提出していると考えることができるのである。なぜか。

この並行関係を証立てる媒介項となるのは、P・L・バーガーの学説とその影響である。というのも実は、バーガーの議論には現在の「言い訳」批判に先立ってなされた社会学の言い訳に対する批判が存在しているからである。そしてスミスは現在のアメリカ社会学の支配的な動向を「聖なるプロジェクト」(Smith, 2014) と呼び、そこにバーガーの影響がある種先鋭化されたラディカルな形で刻印されていると見たのである。かくしてスミスは、アメリカ社会学のそうしたラディカル化の傾向に自身の議論を対置し、それとは異なる形で社会学を意義づけようとする。換言すれば、彼は聖なるプロジェクトの「社会構築主義的」な論理の無制限の氾濫を批判し、批判的実在論をはじめとする自身の規範的枠組みを社会学に与えようとしたのである。そ

れゆえバーガーを介して聖なるプロジェクトとそれに対するスミスの批判を見ていくことで、「言い訳」論をめぐるアメリカ社会学内部の構図の一端が描けるのではないかと思われる。後述するように、それはアメリカ社会学とそれを取り巻くアメリカ社会の現状をある意味で象徴的に描き出すことになるだろう。その点においてこれは、現在必ずしも主流ではないかもしれないが重要なアメリカ社会学の一つの動向を確認することになるはずである。それに加えて、スミスは日本においてはまだほとんど知られていない人物であると想定されるため、本号の特集企画と関連させる形でその議論の一端を紹介することにも一定の意義があると考えられる。さらにそれは、今後彼の議論を本格的に論究するための導入にもなるであろう。

右に述べたことを示すべく、以下では、まずはスミスのアメリカ社会学論を検討した上で（第二節）、彼の立論を支える諸前提をごく簡単に概観し、その社会理論が目指している方向についての示唆を与えたい（第三節）。

二 アメリカ社会学の「聖なるプロジェクト」

二・一 社会構築主義の「暴走」

二〇世紀後半から現在までのアメリカ社会学の展開をふり返った論文の中で、J・H・ターナーは、そこにおける

極端な左傾化とラディカルな行動主義化をスミスの用語を借りて「聖なるプロジェクト」と称し、その行く末を案じている (Turner, 2019)。これは、現在のアメリカ社会学に対するスミスの懸念がある程度共有され、その見解が一定の評価を受けていることを示す一例だと言えるだろう。ターナーがこうした動向に対置するのは価値中立的な科学としての社会学なのだが、しかしながら、スミス自身は決してそうした立場を選んでゐる訳ではない。彼の議論にも聖なるプロジェクトとは別種の強い規範的志向が備わっているからである。とはいえそれを明らかにするためにも、まずは彼が聖なるプロジェクトをどのようなものと思っているのかということを確認しておかねばならない。

現在のアメリカ社会学に対するスミスの理解は、アメリカ社会の現状に対する憂慮と不可分である。それは深まりゆく分極化に対する関心である。周知の通り、これは現代のアメリカを語る際のキーワードの一つである。スミスはすでに福音派信徒を主題とした著作の中でこの問題を取り上げていた (Smith, [2000]2002)。彼はこうした事態の根底に、自らが物語と呼ぶ、社会的世界やそこに生きる人間の生の意味の多元化、およびその結果として招来される相對主義的な状況を見出す (Smith, [2003]2009: 52-3)。自らの生を意味づける物語の相違は、ときに他者との間での相互的な共感や理解を妨げることになり、最悪の場合には暴

力的な闘争を引き起こしかねないからである。スミスはこうした状況を大いに憂いていたのである。

ではアメリカ社会をその主たる研究対象とするアメリカ社会学の状況は、スミスの目にはどのようなものとして映ったのだろうか。彼の見るところでは、アメリカ社会学の中核は聖なるプロジェクトが占めており、このことによる弊害が種々の場面で現れているという。聖なるプロジェクトとは、アメリカの社会学者が普通はそれと意識することなく加担している、ある暗黙の目的のことである。それは次のように定式化される。

集合的営為としてのアメリカ社会学は、実際には次のような非現実的なプロジェクトに加担している。すなわち、自律的、自発的、個人的な行為主体(であるべきもの)としてのすべての人間の解放、平等、道德的承認を完全に実現し、その結果として、彼らが自身、自身の好むアイデンティティを構成し、自らが選ぶ関係の中に入りし、そして経験的、物質的、身体的な快楽の満足に同等に享受することによって、彼らが個人的に望む生活を送るようになるというプロジェクトである。(Smith, 2014: 7-8)

ここに述べられているのは、すべての個人の自律および

平等とその願望の道徳的承認である。無論そこには様々の思潮が混融しているが、スミスによれば、なかでも中心的なのは原子論的個人主義と社会構築主義の主張である。それゆえ聖なるプロジェクトにおいて想定される人間は、自分以外のものによる影響を受けない、その意味において平等な自立した諸個人であり、彼らは道徳的な規範よりも自らの欲求や願望を第一義的な規準としながら、自分自身やその周りの他者との関係性を自由につくり変えていくとされる。そこにはたとえ拘束があったとしても、それは、「他の個人が同じようにすることを妨げない限りにおいて」(Smith, 2014: 16) という弱いものでしかないという。

容易に想像しうるように、このようなプロジェクトを暗黙のうちに追求する社会学は相対主義的な状況に対する歯止めとしては極めて脆弱なものである。というのも、「様々の人々が様々の類の経験を快であると考えるので、何人たりとも、他者がいかなる快楽や関係を追求し、享受すべきであるかを定める権利を持たない」(Smith, 2014: 17) とされるからである。アメリカ社会学の聖なるプロジェクトは非常に強い平等主義的な志向を持っているが、スミスによれば、まさにそのために様々の相対主義やその果ての分裂的状况に対してそれはほとんど無力なのである。スミスの見るところでは、それはアメリカ社会学が実質的な理念的核心を欠いてしまっているからである。これは、アメリカ

社会学における支配的な傾向がアメリカ社会における問題的状况と——直接的な因果関係があるとはまでは言えないまでも——パラレルであり、後者の事態を助長しかねないものであるということを意味している。その理由の一端は、人間はすべての実在を自由に構築することができ、その結果としてそれらの構築物はおしなべて等価なものであるとする、行き過ぎた社会構築主義の主張にあるとされる。

一九六〇年代後半以降、ピーター・バーガーの社会構築主義が社会制度を変革することを目的とした行動主義の重要な理論的正当化を提供した(その大半はバーガーの意図に反していたが)。「……」ポスト構造主義もポストモダンリズムも「……」アメリカ社会学の主流において大流行した訳ではない。とはいえずすでに述べたように、懐疑論的に相対化をもたらず、権威に敵対的なその態度と感性は聖なるプロジェクトを見事に補完し、より拡散した、背景的な仕方で社会学に影響を与えているのである。(Smith, 2014: 128-9)

かくしてスミスの批判の対象は、アメリカ社会への憂慮を背景としながら、社会構築主義的思考の「暴走」(Smith, 2010: 152)、ならびにその結果として招来される相対主義の蔓延、さらにはより過激な社会学のラディカル化に絞る

込まれることになる。これが彼の立論を根底において促していた動機的一端であった。

二・二 聖なるプロジェクトと「言ひ訳」論

冒頭でも示唆したようにここで重要なのは、聖なるプロジェクトの右記の傾向の中に、スミスがバーガーの（本人の意図とは裏腹の）影響を読み取っているという点である。というのも、実はバーガーのいわゆる「社会構築主義的」な議論は彼による社会学批判——これは社会学による言ひ訳の提供に対するバーガーの批判であった——と密接に結びついていたからである。この点を明らかにすることによって、スミスの立場がより一層明確なものとなるだろう。

博士論文を除けば最初の作品となる『不安定な情景』において、バーガーは社会学の役割理論や準拠集団論に示される社会像に対する批判的立場を明示している。それは、もともと人間によってつくり出された「虚構 (fiction)」であるはずの社会のリアリティが、現実そのものとして受け取られるようになってしまふことへの批判である。バーガーによればこれは社会的世界の安定化のためには不可欠の事態であるが、それでもやはり、そこには道徳的に非難すべき点が含まれる場合があるという。それは、ある人の行為の責任が曖昧化されてしまいかねないということであ

る。曰く、「虚構を現実として受け取ることは道徳的な言ひ訳となりうる。そうすることで、人は自らの行為の責任から逃れうるのである」(Berger, 1961: 85)。

バーガーが例に挙げるのは死刑判決とその執行に関わる裁判官や執行人の役割である。例えば死刑の判決を下した裁判官はある人の死に決定的に関与することになるのだが、役割という概念を用いれば次のような責任逃れが可能になるという。すなわち「彼は裁判官として責任があるのであって、彼が人格としてそうであるところの、一人の個別的かつ唯一的な人間として、責任があるのではない」、と(Berger, 1961: 86)。これは本人に、その役割を担う以上「他に選択肢はない」(Berger, 1961: 94) とう論理を与えることである。バーガーはいうた言ひ訳を「J・P・サルトルの用語を用いて『自己欺瞞 (bad faith)』」(Berger, 1961: 86)と呼ぶ。先に示唆したように、この議論は、人間と社会が共に（つくり／つくられ）の関係にあるというバーガーの周知の学説と表裏一体のものであった。すなわちバーガーの理論的図式において、人間と社会は互いを構築し合う関係にあり、そのために両者は互いにその都度の今とは別様のものになりうる可能性を常に孕んでいる。したがって右記の言ひ訳は、本当は別様の可能性があったにもかかわらずそれを否認するがゆえに、自己欺瞞的なものと見なされることになる。このようにしてバーガーは、一方で既

存の社会学理論の示す社会像に含意されていた道徳的な言
い訳を批判しながら、他方で人間と社会が相互的構築関係
にあるとする議論をそれに対置したのである。

それでは、バーガーの言い訳批判は聖なるプロジェクト
に成功裡に継承されたのであろうか。一見するとこの問い
かけには肯定でもって答えたくなるかもしれない。彼の構
築主義とそれに基づいた批判は聖なるプロジェクトの核心
をなすものとされるからである。だが詳しく見てみると、
アメリカ社会学の聖なるプロジェクトには、バーガーの議
論が極めて先鋭化された、それと同時にある種振れた形で
受け継がれていることが分かる。実際、スミスはその影響
関係をバーガーの意図に反するものと見ていた。先鋭化さ
れているというのは、つまり、聖なるプロジェクトにおい
てはバーガーの議論が社会変革の要請に結実する形で援用
されているということである。見てきたように、アメリカ
社会学の聖なるプロジェクトは個人のエージェンシーの自
由な発露を呼びかけるものであった。それは社会による抑
圧と拘束からの個人の解放という形で謳われる。換言すれ
ばその目標は、現在は社会によって搾取され、虐げられて
いる諸個人の、社会変革を経た先の未来における解放とし
て掲げられるのである。かくして社会は変革ないし打倒さ
れるべき対象として描出されることになる。実際にスミス
も、「社会学の聖なるプロジェクトは、社会制度や社会構

造がほとんど本質的に抑圧的、搾取的、拘束的なものな
のではないかと考える」(Smith, 2014: 202)と述べている。

現在の社会学の左傾化(と右派の論客に見なされがちな
傾向)に寄せられている、それが「社会学的言い訳」であ
るとする批判も、おそらくはこうした社会像に関わってい
るのであろう。すなわち聖なるプロジェクトにおいては、
抑圧的な社会像が過度に強調されることによって、バー
ガーが批判したはずの社会学による言い訳の提供が逆説的
に温存されてしまっているということである。換言すれば、
それは現在における抑圧を殊更に説くことによって、社会
への全面的な責任転嫁の論理に横滑りしていきかねない可
能性を孕んでいるのである。

他方、それが振れた形であるというのは、聖なるプロジェ
クトがこうしたラディカルな目標達成のために、一方で抑
圧的ではあるが、他方で極めて可塑的な社会像を想定して
いることに関わる。これは先に社会構築主義的論理の行き
過ぎということで説明した側面である。スミスが言うには
「社会学の聖なる努力は、特にその理論が社会的世界を、
社会運動や政治的なプログラム、改革、革命を通じた人間
による目的的な変容の影響を受けるようにする形で『非自
然化』してしまいがゆえに、社会構築主義に結びついてい
る」(Smith, 2014: 153)。「非自然化」とは、実際の社会に
はわれわれの身体を含む様々の自然的制約がかかっている

にもかかわらず、それを否認することである。その結果として、聖なるプロジェクトにおいて社会は容易く任意に再構成されうるものとして概念化されることになる。しかしながら後述する通り、この点に関するバーガー自身の見解とスミスの理解は右記の傾向とは正反対なのである。

スミスによれば、聖なるプロジェクトはこのような形でバーガーの学説をラディカルな変革の要請に転換しているという。これがアメリカ社会学の現状に関するスミスの所見である。だが無論こうした捉え方は一面的なものであるとの批判を免れないかもしれない。とはいえ彼が批判の対象として想定していたものを突き止めるためにも、まずは彼の主張を確認しておかねばならない。彼の学説はまさにそれに対する代案として提出されているからである。だとすれば、以上の動向に対してスミスは自らの社会学論をどのようなものとして意義づけようとしたのであろうか。以下では彼の立場を支えていた諸前提を右の議論との関連において明らかにすることで、それを確認する。

三 人格主義的社会理論の方向性

三・一 批判的實在論的な人格主義

スミスが依拠しているのは、彼が「批判的實在論的な人格主義 (critical realist personalism)」(Smith, 2010: 17) と呼

ぶものである。これはその名の通り、批判的實在論と人格主義の思想を結びつけた立場である。批判的實在論はそれについての人間の意志や表象から独立した實在の存在を説くのだが、スミスによれば、人間の人格もまたそのような實在的なものだという。ここに彼の理論が持つ強い倫理性が映し出されていると言えよう。

スミスは批判的實在論に関しては独自の思想を提示している訳ではなく、R・バスカーや彼に続く論者の議論を踏襲しているのだが⁴ (Smith, 2010: 90-2)、その背景にはアメリカ社会とアメリカ社会学の現状に対する先述の彼自身の深い憂慮があった。後年彼は次のように述べている。

批判的實在論への筆者の転回は、実際には主として、『道徳的な信する動物』(「二〇〇三年刊行の理論的著作——引用者」)のいくつかの箇所における自分の推論の中に認められた不十分な点に促されたものであった。その不十分な点は、特に仮定的な認識論に関する議論(第三章)の受け入れがたい帰結(すなわち全面的な認識的相対主義、ひよっとすると完全な道徳的相対主義)、および文化的物語の基礎づけ主義的性質(第四章)をめぐるものであった。批判的實在論はこうした問題に答え、それを克服したのであり、それ以来筆者の研究に大きな影響を与えてくれているのである。

(Smith, [2017]2019: 75-6)

このようにスミスは相対主義の袋小路から逃れるために、われわれの経験や知識から独立した客観的な實在を説きうる立場を求めたのであった。かくして彼は批判的實在論にたどり着き、それに基づいて、聖なるプロジェクトとは異なる規範に志向する理論を構築したのである。

スミスによれば批判的實在論の目指すところは、「実証主義的経験論のパラダイム」(Smith, 2010: 92)と呼ばれるもの(「事実ないし経験と實在とを単純に同一視する立場」と、それに反対する「構築主義、ポストモダンイズム、そしてある種の解釈学のパースペクティヴ」(Smith, 2010: 92)と呼ばれるもの(「存在するのは實在についての社会的に構築された観念だけであるとする立場」の両方に対する代案を提示することだとされる。後者はしばしば「社会構築主義」というラベルで一括される。

もちろん「社会構築主義」は様々の内容を含みうる多義的な名称であるが、スミスの批判の対象は「他の誤った学派や思潮、特にポスト構造主義とポストモダンイズムの影響を受けた」(Smith, 2010: 121)社会構築主義だとされる。それゆえこの批判はある特定の人物というよりも、様々の論者の間で共有された、通俗化した社会構築主義の相対主義的傾向に向けられたものであり、アメリカ社会学の聖な

るプロジェクトへの批判に通底するものである。

その要点は現実が社会的に構築された観念のみからなるのではないということにあるが、スミスによれば、とはいえ他方で批判的實在論は素朴に経験と實在とを同一視しようとはしない。というのも、それは實在の世界を三つの領域からなるものと見なすからである (Smith, 2010: 93)。三つの領域とはすなわち、経験的なもの (the empirical)、顕在的なもの (the actual)、そして實在的なもの (the real) の領域である。経験的なものの領域はその名の通り、世界の出来事についてわれわれが経験するものからなる領域である。顕在的なものの領域は世界の中で生起する出来事すべてからなる領域であり、そこにはわれわれが経験するものも経験しないものも含まれる。それゆえ顕在的なものの領域は経験的なものの領域よりも広い範囲に及ぶ。最後に實在的なものの領域は顕在的なものの領域よりもさらに広いものであり、そこにはこの世界に顕在的には現れないものも含まれている。批判的實在論の説くところによれば、それはこの世界に出来事(「顕在的なもの」)を生起させるメカニズムが含まれる領域である。

このような實在世界の三層構造論は、特に自然科学における実験という営為についての洞察に由来しており、そこからは次のような主張が導き出される。すなわち、批判的實在論における實在的なものの基準は、われわれがそれを

経験しうるかどうかではなく、それが因果的作用力を備えているかどうかであるという主張である (Smith, 2010: 190)。たとえわれわれが経験せずとも、あるものが因果的作用力を備えている限りにおいて、それは実在することである。

それゆえ実在についての知識や観念は、実在そのものと完全に一致することはない。しかしそれらは実在との関連を全面的に失う訳でもない。これは、知識には自存的 (intransitive) 次元と意存的 (transitive) 次元があるとされることによる。前者は知識の実在的な対象に関わる次元であり、当の対象が人間の主観から独立して存在することの意味する。後者はその対象についての知識の内容に関わる次元、人間の意識に媒介された次元であり、時間と共に変化する社会的産物であるとされる。このために批判的実在論は、一方でわれわれの知識や観念は社会的に構築され、その結果として相対的で可謬的であることを認めながら、他方でこれらの知識や観念が実在によって修正される可能性に対して常に開かれていること、そのためにそれらの真偽の度合いがおしなべて等価なものではないことを説くのである (Smith, 2010: 93-5)。

以上が批判的実在論の基本的方針であるが、先に述べたように、スミスはそれを人格主義の思想に結びつける。人格主義とは、人間を人格と見なす広範な哲学的思潮のこと

である。人間を人格と見なすということは人格と非人格的事物とを区別すること、すなわち M・ブーバーの言い回しを借りれば、『あなた』であるすべての自己を『それ』であるその他すべてのものから区別する (Smith, 2010: 104) ことである。スミスはこのようなものとしての人格もまた右記の意味で実在的なものと主張する。つまり彼は、それについてのわれわれの意志が何であれ、人間の人格は実在すると説くのである。その実在性についての詳しい論証はスミスの著作『人格とは何か』(Smith, 2010) に譲らざるをえないが、それは次のように定義される。

筆者は人格、という言葉で次のものを意味している。すなわち主観的経験、持続的アイデンティティ、道徳的コミットメント、および社会的コミュニケーションの意識的、反省的、身体的、自己超越的な中心であり、そして自分自身の責任ある行為ならびに相互行為の有力な原因として、他の人格的自己や非人格的な世界との愛に満ちた関係の中で自分自身の伝達不可能な自己を発達させ、維持するためにエージェンシーと主観性のための複雑な能力を行使するものである。(Smith, 2010: 61)

ここに引いた人格の定義には、少なくとも、大別して次

の三つの位相が想定されている。すなわち主観的な自己、他者とのコミュニケーション的な関係、そしてこの自他の関係を規制する倫理性である。これは、そこに他者への社会的な回路が本来的に織り込まれているという点で、原子的な個人とは対極の人間観である。だがスミスにとってさらに重要なのは、最後の倫理的な関係の位相だとされる。

人格による行為ないし他の人格との相互行為は無目的なものではない。それはある目的のために行なわれるのだが、スミスはそれについて「他の人格的自己や非人格的な世界との愛に満ちた関係の中で自分自身の伝達不可能な自己を発達させ、維持するために」と述べている。まさにこれが自己と他者の倫理的関係の内実に関わる言明である。社会関係やコミュニケーションのすべてが人格を規定するのではなく、重要なのは、それが置かれる関係が愛に満ちた関係であり、人格としての自己がその中で開花するということである。「愛に満ちた (loving)」という用語でスミスが意味しているのは「他者にとつての本当の善のために自分自身を拡大し、利用するという目的的行為を含むような仕方、自己を超えて他の人格や事物と関わる」(Smith, 2010: 73) ということである。人格はこのようにして自己を利するもの、より正確に言えば、他の人格への奉仕が自己の実現と福德になるようなものとして存在するとされる。自他の関係はこのような倫理性によって規定されるも

のとして概念化されており、スミスはこうした意味での人格が実在すると述べるのである。

三・二 スミスによる社会学の意義づけ

以上が聖なるプロジェクトに対するスミスの批判が依拠していた立場である。だとすればその代案として、彼自身の目指した方向性はいかなるものなのだろうか。

スミスがアメリカ社会学の聖なるプロジェクトにおける構築主義的な論理の「暴走」にバーガーの影響を見ていたことは、すでに確認した通りである。すなわち、そこにおいて社会やそれを含む現実とは極めて可塑的で、容易にくり変えができるものとして概念化されているということであった。だがそれと同時にスミスは、これがバーガー本人の意図とは裏腹のものであることも理解していた。それゆえ、彼はバーガーの学説を別様に継承しようとするのである。これに際してスミスが注意を促すのは、バーガーとT・h・ルックマンの『リアリティの社会的構成』という作品における「reality」の意味である。彼が言うには、

バーガーとルックマンは明らかに次のことを前提としていた。すなわち「……」客観的な実在 (reality) がそれについての人間の意識とは独立して存在するということである。「……」バーガーとルックマンは決

して実在についての人間の知識と実在それ自体とを混同しなかった。(Smith, 2010: 126)

ここにはアメリカ社会学の聖なるプロジェクトに継承された、バーガー以降のラディカルな社会構築主義を生み出すことになった誤解の源泉が語られている。それはバーガーの議論における用語の曖昧さに関わるものである。すなわち、「reality」という用語が実在そのものを指すのか、実在についての信念ないし知識——日本語で一般的に「リアリティ」と称されるもの——を指すのかということに関する曖昧さである。

この点に関するバーガーの責任は決して小さくないと思われるが、それについて今は措いておく。ここで重要なのは、彼が「リアリティの社会的構成」という定式化で意味していたのが後者だったということである。というのも彼自身が、その意図は「あらゆるリアリティは社会に由来する解釈の支配下にある」(Berger & Zijderveld, 2009: 66)ということだったと述べているからである。つまりバーガーは、実在するもののすべてが無の状態から社会的に構築されるということを言おうとしていたのではない。構築されるのは実在についての解釈(＝リアリティ)なのである。例を挙げよう。例えばある国が隣国に武力でもって攻め入るという事態が生じた場合、これを隣国への「侵略」と見

なすのか、隣国の脅威に対する「自衛」と位置づけるのか、あるいは隣国の国民をその抑圧的な体制から「解放」するための行動と呼ぶのかということは、多分に解釈の分かれるところであろう。しかしながらそれに関するわれわれの解釈が何であれ、その対象たる事態は実在しており、それは動かしえない現実だということである。

そしてこのことが、当の現実についての解釈にもある程度の制約をもたらすことになる。右記の場合、それを平和な状態として規定することは容易ではない。おそらく現実がそれを許さないだろう。バーガー自身が引き合いに出していた先の例で言えば、裁判官という役割は社会的構築物である一方で、その役割を付与される個人は実在物である。とはいえ、たとえこの役割を放棄したとしても、当の個人がそれ以外の何にでもなれる訳ではない。当人は当人であらざるをえず、その制約の中で別の何かなれるだけである。当人の実在的存在がその役割ないし存在の仕方の幅に制限を設けるのである。したがってスミスの批判する類の社会構築主義とは異なり、バーガーの立場は「根本的に『実在論的』」(Eberle, 2019: 136)なものであったとする見方もある。スミスもまた、バーガーのこうした立場は先に見た批判的実在論の立場に通底すると考える。かくして彼はバーガーの学説をまさにこのような、人間による構築の限界を含意したものとして受け継ぐとするのである。

その結果として、スミスの提示する社会像は聖なるプロジェクトにおけるそれに比べればはるかに可塑性の低いものとなる。それは「われわれの複雑で動態的な、成層化された、緊張に満ちた實在の複雑さと不便²⁰」(Smith, 2010: 197)を備えた社会だとされる。両者の社会像の最も大きな相違は、スミスの理論において社会構造は諸々の制約を受けるものとして概念化されていること、ならびに、それが強い倫理的性質を帯びていることである。もちろんスミスも、社会がある部分人間によってつくり上げられる實在であるということを否定しない。しかしながらそこには様々の制約がかかるというのである。すなわち、

人間の人格には、自分自身、その関係性、その文化、そして物質的世界を形成し、再形成するための巨大な因果的能力が備わっている。しかしそうした人間の能力のすべては、人間の身体、意識、行為に課された自然な限界の制約の中ではたらく。能力と限界のこうした衝突が、人間の社会生活と社会構造の形成を生み出し、それを焚きつける創造的かつ動態的な緊張とエネルギーを生み出すのである。(Smith, 2010: 331)

ここに述べられているように、社会構造は人間の因果的能力によってのみ生み出されるのではなく、それらと自然

の制約との衝突と緊張から構成される。人間には、身体や精神生活、實在の解釈等々の面で様々の自然な限界があるというのである (Smith, 2010: 332-9)。

だが社会構造を拘束するものはそれだけではない。スミスによれば、社会構造は、人間がこのような限界に直面したときに、先に見たような意味での人格としての生の継続を可能にするために生み出されるものだからである。

例えば物質的優位、関係的支配、あるいは専ら存在論的な安心のみを求める動機以上に、より広範に人格の生の維持と繁栄に向かう自然な衝動こそが、われわれの自然な制限に直面した際に、人間の存在から社会構造を生成する。(Smith, 2010: 340)

このように社会構造の存在理由は人格としての人間の生の存続だとされる。したがってそれは単に抑圧的であるだけのものではない。ときに社会構造はそうした側面を帯びるかもしれないが、スミスにあっては、それは第一義的にはすべての人の人格の実現への寄与という責務を負ったものなのである。これは、人格が他者との倫理的関係にあるとされていたことに由来する。かくして社会構造は、人間が持つ様々の自然な限界に影響されると同時に、人間の人格としての生による制約も受けるとされる。すなわち聖な

るプロジェクトの人間像、社会像とは異なり、スミスの社会理論において社会構造は自然の限界と人格主義の二つの側面から制約を受けるものとして概念化されているのである。前者が實在論的な制約であるとすれば、後者は人格主義に由来する倫理的な制約であると言えるだろう。

であるならば、スミスの立場は次のようなものとして定式化することができる。すなわち彼は、一方で人間が構築しうるものの限界を見定めることを通じて、他方で社会構造の抑圧的な側面ではなくその倫理的な責務を取り上げることによって、社会学の営為を「言い訳」の提供や変革の要請とは異なるものにしようとしているのである。曰く、

学問としての社会学の中心的な目的は、次のことについての信頼しうる知識や理解を提供することによって、人間の善の達成を助けるということではなければならない。すなわち、一方でいかなる類の社会制度や社会構造が人間の人格の繁栄につながる傾向にあるのか、他方でいかなる類のそれらが人格の繁栄を妨げ、傷つける傾向にあるのかということに関する知識や理解である。(Smith, 2010: 487)

かくしてスミスは社会学をラディカルな行動の唱道ではなく、人格の開花繁栄への寄与という倫理的課題に結びつ

けることによって、それを意義づけようとする。これが聖なるプロジェクトの代案として彼が提唱する、人格主義的社会理論のプロジェクトであった。

だとすれば、われわれは彼のこうした試みをどう評価すべきだろうか。無論それについての本格的な論究は、その成否も含めて、今後彼の社会理論の詳細を具体的な論題に関わらせて検討していく中でなされていくはずである。残念ながらこの問題を論ずるには別の機会を俟たねばならない。だが現時点においても、彼の社会理論の意味について少なくとも概略的な示唆を与えることは可能である。最後に一言、この点について述べておきたい。

スミスは『人格とは何か』の続編である『開花繁栄か破壊か』の冒頭において、自身の社会理論の意義を説明している。それによれば、その目指すところの一つは善についての実質的な観念を提示することだとされるが (Smith, 2015: 15)、まさにこの言明に彼のプロジェクトの方向性が集約されていると考えられよう。端的に言えば、それはポスト・リベラルの秩序の模索ということである。特にロールズの『正義論』以降、善に対する正の優先ということが現代のリベラリズムの基本的理念の一つとなったことは周知の通りである。スミスの狙いはこのような秩序構想を批判することにあるのである。曰く、

実際に何が善であるのかということについてのより根本的な感覚がなければ、われわれは善に対する正の優先を論じ始めることすらできない。「……」今日多くの人が次のように考えている。すなわち人間にとっての善は、人々が自分自身にとって善であると考え、ものものすべてである、と。「……」筆者はこの考えが誤っていると主張しよう。「……」人間の善は各人の決定に簡単に委ねられるものではない。実在的で真に人間的な善が実際にあるのである。(Smith, 2015: 4)

スミスは右のように述べて、アリストテレスの議論なども援用しつつ善についての実質的なヴィジョンを提示し、それに基づく社会を構想しようとする。それは正の概念をより根本的なレベルで支える善の概念を組み込んだ社会の構想に他ならない。もちろんその全貌は彼の著作に譲らざるをえないが、こうした言明からでも彼の社会学論の方向性は十分に明らかであろう。このように、スミスの理論構築は聖なるプロジェクトへの批判に駆り立てられながら、最終的にはリベリズムを超越した秩序の構想に志向しているのである。この点を最後に確認しておきたい。

四 おわりに

本稿は「社会学的言い訳」批判という主題に関わらせる形で、社会学の意義についてのスミスの議論を概観してきた。かつてアメリカにおいて社会学の意義論は、一九六〇年代に左派のラディカル社会学が台頭する中で隆盛を誇った。そこではラディカルな行動の重要性が謳われ、それへの寄与こそが社会学の意義だとされた。しかし現在こうした潮流への懸念が表明されつつある。「社会学的言い訳」批判はその一つであるが、スミスの所論はアメリカ社会学の内部にもそうした風潮が存在することを示唆している。一方でこれは、社会学の意義をめぐる論争が現代においても社会学の内外でいまだに大きなアクチュアリティを持っているということを意味している。だが他方で、そこには危うい一面がない訳でもない。

見てきたように、スミスの議論は極めて論争的な意図を持って展開されたものであり、聖なるプロジェクトとは別種の強い規範性を備えたものであった。そこに現代の分極化状況の超越という狙いがあつたことは確認した通りである。これ自体は崇高な目標であろう。しかし現在のアメリカにおけるある思想的動向を踏まえたとき、それが孕む危うい側面も透けてくる。踏まえておくべきなのは、現在、リベリズムに対して本格的に死亡宣告を下そうとする保

守派の動きがあるということである。⁽¹⁰⁾ スミスの主張はポスト・リベラルな秩序の模索という点でそうした潮流と密かに共鳴しあう要素を持つており、まさにそこに彼の議論の危うさがあるのである。換言すれば、聖なるプロジェクトのラディカルな傾向を鏡写しにするようにして、スミスの議論もまた反対の方向においてイデオロギー的論争に絡めとられかねない可能性を胚胎しているのである。もちろんスミスと現代の保守派との安易な直結や同一視には慎重になるべきかもしれない。彼が現代の思想的状況の中で占める位置は、その人格主義的社会理論の試みの成否と合わせて今後綿密に検討せねばならない論点である。しかしながらアメリカとアメリカ社会学の現状を象徴的に映し出す事例として、スミスの所論が右記のような文脈の中にあることを押さえておくのは無駄ではないはずである。

註

(1) 批判的実在論は、イギリスの哲学者R・バスカーによって提唱された科学哲学であり、現在では英語圏を中心に、北欧諸国や日本においても支持者を獲得しつつある思潮である。この立場に立つ代表的な論者としては、スミスの他にM・アーチャー (Archer, 1995) やD・エルダー＝ヴァス (Elder-Vass, [2012]2013) などがある。日本においてもアーチャーの作品を邦訳した佐藤春吉などによって、批判的実在論の紹介が進めら

れている (佐藤二〇一五)。またこれに関連させて現在までのスミスの研究歴を簡単に述べておく。スミスは一九六〇年生まれの社会学者であり、現在はノートルダム大学の社会学教授である。彼の元来の専門は宗教についての社会学的な調査研究であった。ここには彼のキリスト教信仰も反映されていると思われる。二〇一〇年に福音派からカトリックに改宗しているが (Smith, 2011)、その著作からは、彼が以前から篤信の信徒であったことが窺われる。社会学関係の作品も宗教への彼の関心の強さを示している。例えば博士論文では解放の神学 (Smith, 1991) が主題とされており、その後の著作ではアメリカの福音派 (Smith, [2009]2002) や、アメリカの青少年の宗教的関心 (Smith & Denton, [2005]2009; Smith & Snell, 2009) が取り上げられている。特にアメリカの青少年の宗教的関心を主題とした二つの作品は、前者が二〇〇六年度の、後者が二〇一〇年度の『クリスチャニティ・トゥデイ』誌のディスティンディングイッシュト・ブック・アワードをそれぞれ受賞するなど、高い評価を得ている。強調は原著者によるものであり、以下、特に断らない限りはすべて同様である。なおこのプロジェクトは特定の人物に象徴されるようなものではなく、現在のアメリカ社会学の全般的な傾向だとされている。スミスが取り上げている事例は教科書を含む様々な刊行物、アメリカ社会学会全国大会やそこの各種部会のテーマなどであるが (Smith, 2014: 28-114)、無論これは過度の一般化を含む特徴づけであると言えるかもしれない。

(3) このような事情を踏まえると、スミスの理論構築の背景にはF・キュセの言う「フレンチ・セオリー」 (Cusset, 2005: 二〇一〇) の流行があったと見るができる。それは文化戦

争におけるマイノリティの理論的武器として鑄直されたフラン
ス思想の諸学説のことである。スミスの議論は、聖なるプロジェ
クトに象徴されるこうした動向に対するアンチテーゼと見なし
うるのである。

- (4) 批判的実在論の「批判的」という用語の内実は論者によって様々であり、極めて多義的である。したがってその詳細を明らかにするために別論が必要となるだろう。ちなみにスミスはその意味として次の四つを挙げている。すなわち(一) 反基礎づけ主義的性質、(二) 科学が社会的に状況づけられた人間の実践であるという可謬主義的な科学観、(三) 近代における事実と価値の分離に対する抵抗、(四) イデオロギーや政治的行動主義に陥ることなく規範的な批判的理論に携わろうとする姿勢、である (Smith, 2010: 98)。

- (5) 批判的実在論の立場から見れば、実験とは、単にこの世界の中で生起する現象を再現するという作業ではない。批判的実在論によれば、それは、種々の現象を生み出す因果的諸力が極めて複雑に絡まり合う開放的なシステムとしての世界の中から、ある特定の現象を生起させる因果的メカニズムを閉鎖的なシステムとして人為的に独立させて取り出す作業なのである。批判的実在論の見るところでは、この世界の現象は、それらの背後で様々の因果的作用力が複雑に絡まり合い、相互に干渉し合った結果として生起している。したがってわれわれが経験するものを生み出すメカニズムは必ずしもわれわれの経験の中に現れる訳ではないということになる。

- (6) 式部信はバスカールの著作の邦訳において「intrusive」[transitive]という用語にそれぞれ「自動的」「他動的」という

訳語を当てている。式部によればそれは、これらがそれぞれ文法用語の自動詞、他動詞に由来する対義語であるという理由による (Blaskar, 1975 = 二〇〇九・三五九一六〇)。それに対して佐藤はアーチャーの著作の邦訳において「自存的」「意存的」の訳語を用いている。佐藤による訳語の方が原語のニュアンスを分かりやすく伝えていると思われたため、本稿ではこちらを採用しておく。訳語の選択をめぐる佐藤の説明については (Archer, 1995 = 二〇〇七・x) を参照されたい。

- (7) もちろんこの問題に関する論証はスミスの理論、立場の妥当性を量る上で極めて重要なものであり、スミスの試みの成否の一端はこの点にかかっているとも言える。しかし以下では本稿の主題設定に鑑みて、ひとまず彼の方向性を示すことに議論の焦点を絞りたい。ただしスミスによる人格の实在性の論証はまだ不十分な点を残すものであり、それについての批判も寄せられているということ付記しておく (Martin, 2011)。

- (8) スミスと同じくエルダー＝ヴァスもバーガーとルックマンの理論を批判的実在論の立場から継承しようとしており、彼らの学説の意義とスミスの著作の重要性を認めている (Elder-Vass, [2012]2013: 7)。それゆえバーガーからスミスへと続く理論的発展の系譜は、社会構築主義から批判的実在論へというより大きな理論的転回の一部であると言えるのかもしれない。

- (9) 構築主義的な論理の行き過ぎへの反対という立場からも容易に想像されうように、ここでのスミスの議論は、例えばジェンダー論などに対する極めて論争的な含意を孕んでいる。スミス自身もこの点については自覚しているようであるが (Smith, 2010: 232-3)、批判的実在論の立場からのより詳しい主張につ

らいつは (Elder-Vass, [2012]2013: 121-39) を参照された。

- (10) 「ポスト・リベラル保守」とも呼ばれるようになった動向については、例えば邦訳もされた P・J・デニーン の著作 (Deneen, 2018 = 二〇一九) などを参照された。

文献

引用文はすべて筆者が原典から訳出したが、文脈に応じて既存の邦訳とは異なる表現を用いている箇所もある。

- Archer, Margaret S., 1995, *Realist Social Theory: The Morphogenetic Approach*, Cambridge: Cambridge University Press. (=二〇〇七、佐藤春吉訳『実在論的社会理論——形態生成論アプローチ』青木書店。)
- Bhaskar, Roy, 1975, *A Realist Theory of Science*, Leeds: Leeds Books. (=二〇〇九、式部信訳『科学と実在論——超越論的実在論と経験主義批判』法政大学出版云。)
- Berger, Peter L., 1961, *The Peculiar Vision: A Sociologist Looks at Social Fictions and Christian Faith*, New York: Doubleday.
- Berger, Peter L. & Anton Zijderveld, 2009, *In Praise of Doubt: How to Have Convictions without Becoming a Fanatic*, New York: HarperOne. (=二〇一七、森下伸也訳『懐疑を讃へ——節度の政治学のために』新曜社。)
- Cusset, François, 2005, *French Theory: Foucault, Derrida, Deleuze & Cie et les mutations de la vie intellectuelle aux États-Unis*, Paris: La Découverte. (=二〇一〇、桑田光平・鈴木哲平・畠山達・本田貴久訳『フレンチ・セオリー——アメリカにおけるフランス現代思想』NTT出版。)
- Deneen, Patrick J., 2018, *Why Liberalism Failed*, New Haven: Yale

University Press. (=二〇一九、角敦子訳『なぜリベラリズムは失敗したのか』原書房。)

- Eberle, Thomas S., 2019, "Variations of Constructivism," Michael Pfadenhauer & Hubert Knoblauch eds., *Social Constructivism as Paradigm? The Legacy of The Social Construction of Reality*, London: New York: Routledge, 131-51.
- Elder-Vass, Dave, [2012]2013, *The Reality of Social Construction*, Cambridge: New York: Cambridge University Press.
- Martin, Raymond, 2011, "What is a Person? Rethinking Humanity, Social Life, and the Moral Good from the Person up," *Notre Dame Philosophical Review*, (Retrieved December 24, 2021, <https://ndpr.nd.edu/reviews/what-is-a-person-rethinking-humanity-social-life-and-the-moral-good-from-the-person-up/>).
- Porpora, Douglas V., 2015, *Reconstructing Sociology: The Critical Realist Approach*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐藤春吉「二〇一五」『批判的実在論による社会科学論の基本特徴——バース・タナー・マーク他著「社会を説明する」に準拠して』『唯物論と現代』関西唯物論研究会、五四：九二——一〇。
- Smith, Christian, 1991, *The Emergence of Liberation Theology: Radical Religion and Social Movement Theory*, Chicago: London: The University of Chicago Press.
- , [2000]2002, *Christian America?: What Evangelicals Really Want*, Berkeley: Los Angeles: University of California Press.
- , [2003]2009, *Moral, Believing Animals: Human Personhood and Culture*, Oxford: New York: Oxford University Press.
- , 2010, *What is a Person?: Rethinking Humanity, Social Life, and*

- the *Moral Good from the Person up*, Chicago: London: The University of Chicago Press.
- _____, 2011, *How to Go from Being a Good Evangelical to a Committed Catholic in Ninety-Five Difficult Steps*, Eugene: Cascade Books.
- _____, 2014, *The Sacred Project of American Sociology*, Oxford: New York: Oxford University press.
- _____, 2015, *To Flourish or Destruct: A Personalist Theory of Human Goods, Motivations, Failure, and Evil*, Chicago: London: The University of Chicago Press.
- _____, [2017]2019, *Religion: What It is, How It Works, and Why It Matters*, Princeton: Oxford: Princeton University Press.
- Smith, Christian & Melinda Lundquist Denton, [2005]2009, *Soul Searching: The Religious and Spiritual Lives of American Teenagers*, New York: Oxford University Press.
- Smith, Christian & Patricia Snell, 2009, *Souls in Transition: The Religious and Spiritual Lives of Emerging Adults*, New York: Oxford University Press.
- Turner, Jonathan H., 2019, "The More American Sociology Seeks to Become a Politically-Relevant Discipline, the More Irrelevant it Becomes to Solving Societal Problems," *The American Sociologist*, 50(4): 456-87.
- 梅村麦生, 二〇二一, 『『社会学の言ひ訳』批判』日本社会史学会 第六〇回記念大会報告原稿。